

# 常山紀談

十八

		和書門	
一七	二二	三〇	四二
冊	架	函	號

庫文閣内		和書	
一七〇	二二	三〇	四二
函	架	冊	號

第一

内閣文庫	
番號	和 42301
冊數	17 ( 5 )
函號	170 49



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



常山紀談卷之十八目次

淺草文庫

一 細川幽齋ホリカハ古歌コカを書カキて忠貞チウジを諫イサめマシ事コト

一 本多忠勝ホンダ功名コウキを論ロニせマシ事コト

一 井伊家ヱの附人ツケヒト連署レンシ直政ナオマサを諫イサめマシ事コト

一 堀秀政ホリヒデマサを名人メイジン太郎タロウといイ事コト

一 大久保忠隣オホクベ忠直チウチクの事コト

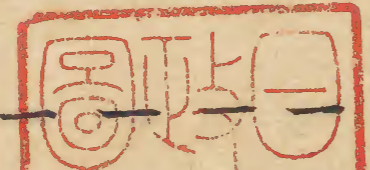
一 天野康景アマノ廉潔レンケツ高國カウクニ寺城ジジを去サるコト事コト

一 井上正就イノウエ駿府スズマツへ御使ミツリれマシ事コト

一 東照宮トウテウ諫言カンゴンを容イシめマシ事コト

一 三河國ミカハノ矢矧橋ヤハギノを修造シユゾウせマシ事コト

一 山名禪高ヤマナ敵衣セウイをキ事コト



東照宮禮を正しむる事

駿府城中へ水を引きんとせしむる時の事

東照宮御中指の事

金の七本骨此扇の御馬印の事

加藤忠廣物語并飯田覚兵衛の事

前田利常戦死の士を吊るる事

黒田如水遺言の事

本多正信加藤嘉明を諭されし事

安藤直次先見并本多正信遺言の事

台徳院殿御行状の事

林道春格言の事

藤惺窩秀吉公を論ぜし事

紀伊大納言頼宣卿諫言を歎びし事

由井正雪反逆の時頼宣卿出仕の事

水野重長諫言の事

松野惣太郎前田権之丞賞せしむる事

佐々九郎兵衛経済格論の事

不破彦三武備の事

井伊直孝衣服儉約の事 附戦國の時質素ありし事

永井尚政執政の用意を直孝に問ふ事

中院通茂公幼宮を教訓の事

松平信綱恭敬の事 附信綱幼年奉公の事



○或人本多忠勝は思慮ある人功名をとげぬる思慮ある人功名

をとげぬると思慮なれば人にも思慮ある人も功名をとげぬるなり

思慮ある人の功名ハ士卒を下知一犬ある功名をとげぬるあり

思慮ある人ハ鎗一本此功名よく大なる事ハなりと答へられしを

○井伊直政壯年銳氣甚しありけり東照宮よりけり

置まじり以下連署して諫書をなげきり

其中より人ハ必向ふざれと事事を思ひ設けしむるが然るべくん

臣等が前の主君此事を申もぬ何あまじきも信玄ハどうも時よ

アツと心より善事ハなれば人ゆくも常小越後の

謙信を以て向ふざれと謙信ハまじき事とてはめを

けられぬはきれば信玄一生の間をとおろし大事の合戦

五度小及びれども大なる敗小ハせしむる殿も本多中務太

輔忠勝を以て向ふざれと勉めておしむるともかみあひ

りくといふ人より進退する良將とハ中書相うあひて

覚えしりと書しりきり

○堀久太郎秀政後左衛門督とりあ士より下邨小いしるまで

うの上小下此情をつくはを第一よき心けらるるなりかまじ

下小根者なり奉行の従者と荷を拵者と輕重を争ふを

聞て其荷物自ららりけり往來一我カハ彼者トのりまのさ

まじり然も一里むり負きまじり持事あり

とつハ尤なりと決断せしむる或時武者押小しり後

しりたるを尤めたるが秀政自ら旗を負く越さそハ吾乗

馬の肝よれたあかんとくく肝よるまき馬よ乗まきま旗さ  
後まきよりた世よ名人太郎といひけるハかく下をつくあま心伏  
用ひらまきつあまこそと人いひあへりりり小田原陣中小卒せ  
らる年三十八なりとくや

○大久保相模守忠隣ハ忠貞の人なり関ヶ原の時 台徳院殿  
木曾路より攻のぼくをひひふ石田敗北後御着陣あり  
くば 東照宮御對面ありまき忠隣近習れ士を以てきた  
き事のとく中々口もいひおまきとあまをさてき直  
よやさんとく座を立くるをあバ先りて見んとてかくとせ  
色を變じて内よ入せまひいぐや有く相模ハ歸りまき仰  
りり相待居て退んくまきハゆるばとせバあくまきで剛直の

者なりよもそくハ歸りまき召まきり 忠隣御前よ  
ありく先何とも言おまき涙を流しまきそれはいふと仰有  
忠隣此度上田を攻りく道よ遲留のりひまき上田を攻りハ忠隣と  
正信がまきまきよ二人の中一人ハ召まきまき罪を糾させまきべた  
りてんまきハあくく不和よ及せまき事よてくまき  
年大軍の攻りりり時よ真田智勇よ挫まきひまき止田固  
しよ遂よ攻落まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
今まきまき支へまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
手を空しりなりりあひぬ君萬歳の後よ日本を治めりり  
御嗣は人の侮りまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき



来りしを 東照宮瀧坂タキサカにおかりせり遠江榛原郡を切取ふ  
仰タイカウ知され大剛の人なり後駿河の高國寺カウコクジ三万石の地を賜ふ  
駿府の城ケイテイ經營此時竹をかせ積置足輕ツミオキ守らせし御領地  
の百姓タテ竹を盗ヌスしを見咎めく斬殺キリコロせ残る者ども逃ヒゲちりて  
代官井戸某キドヒヤクニヤウと訟へし井戸百姓を殺しし鮮死人ゲシニシをせし  
天野アノよアノ天野アノ盗を殺し事罪ありて守る者罪ありて先  
天野アノ罪小初オコナと云々れば井戸訟へたり 東照宮足輕を  
誅チウせよと仰知されし天野始のめくやせしを討り召天野  
不道の者フダウとす者ありて子細シサイあんと仰らるる者本多  
上野ニサノ正純天野アノよアノ仰をいむむ八臣ハシとる者の道ありて  
臣シとる君命を兼らるる事やあると云々し天野よアノ八臣ハシ

~~~~バハ苦ク~~~~もゆ~~~~とつあまふ三万石の禄を辞し  
慶長十二年三月廿九日高國寺を去り行方志ユキカタに成りて  
経オホクく大久保忠隣チカカ尋クワひか一年シタ親シタりては小田原  
の入りしつゆふ隠カクし置オカきり罪多し人を殺し忍シノびて三  
万石の禄をさして隠カクし志を人々稱ホトクニヤウしあり  
○台徳院殿太田某オホタクツ知シよ五百石の禄を賜りて時太田折紙を擲オチけ  
て退出タイニユツしを死罪と思召シメサシる小井上主計頭正就駿府小ヤキ  
後罪を定めしと申シれさし井上駿府よりありて  
東照宮よかくしを聞し召シ奉平久ヒサくむべし基あり太田ハ  
誠マコト無禮なり凡賞罰中らざれば下の恨るハ常此事よて太  
田も無禮フレイと知し人オツ己が身をすくす誘イサスふ心ありて臣下シニカの



直言して諫る者怒り多し刑罰せしめれ家を亡し大軍の中  
よかけ入る者ハ多くハ身を全うして功名を立る者ハ昔より  
諫臣を忠心の第一と以然る今太田よある禄賞中らぶ  
まやと汝を以て向ふ事政務よ心を盡さるなれば泰平の基  
と謂ふてこそはま汝よりのがさりせん事ありとま三河  
池の鯉を鈴木久三郎が取る意なく喰ひ信長より賜ひ酒をも  
りまてよのりよとておろし飲より吾怒る眉尖  
刀を提鈴木を呼し小鈴木肌をぬき大音をあびく魚よ人を  
替る不道ゆく天下よ旗揚んとハ思ひもよと罵り時  
予鈴木が顔よ屈伏して肉よ入はくく思ふまりの者池よ  
て鳥を取し罪ゆくともめを誅ん為まんと心付てまり

の者を救し鈴木を近付汝が志返る悦しきといひは  
鈴木涙を流し密よすべきを今戦國の時あまはあ  
なるがよと存りく無禮の顔をやせふかざる仰を乗りく  
辱さの身よあまりていとついで今太田あも三千石の禄をあ  
くらまよとて井上をさるる御刀を賜りりハ江戸よ  
帰るかくとやハ太田あも禄を増賜りりハ涙を流して  
喜びたり 台徳院殿井上よハ汝が顔よより孝行を  
賞罰の道をとてまよと仰有て左文字の刀を賜りり  
○東照宮淡松よむらませ比ある夜本多正信御前よ有よ  
誰人よあつありん姓名を懐より書を取かり誅めまよと  
かゆくより存る事のゆてまよのそとやセバ大よとらとせ





なす僻事なり田の為水を引んハ花あま一吾庭の水  
ハたのぐさみなり夫よ人を勞する事やある無益の事よ地  
を捨ハ敵不取まてさるる百姓の苦となりと仰らまぬ  
○東照宮御指の中節きことあり年老させまひてハ屈伸  
しがさくちしは是ハどうした御時より数度此戦ひは初の後  
ハ麾さく下知せさるる人とも事急なる不及てハかましく  
とて御奉少く鞍の前輪をさくさくせあつふ血流まて出  
かゝのさした事幾度ともあつた故となり

○東照宮金の七本骨此扇小日九付馬印ハ參河の設樂郡  
牛窪の牧野半右衛門が志すなりを永禄六年よ乞  
得させしめて馬駿となり夫より前の御志すハ

厭離穢土欣求淨土の八字をまて大樹寺の登譽が筆  
なりそのまて明曆丁酉の火災よかまていへ御れ  
とも扇の御志すハ其前より此事少や天文十四年  
公矢矧

川ゆく織田家と軍有し時利なき危りし小本多吉右  
衛門忠豊しつ同降よ入せし御馬駿を賜り討死せし  
とせせし許さるる扇の御馬志すをえく清田殿  
討死し其ひまに危きを遺さるる御志すハ忠豊が嫡  
子平八郎忠高が家よ相傳へ忠高も又戦死し其子忠勝が  
時よ至りく永禄二年東照宮乞返させまひて云り

○加藤肥後守忠廣或夜物致小吾ハ大力あまこと云く  
重き甲二領重し軍よ出バ恐る事あつたと云まて

飯田覚兵衛はくぐりと先殿物具一領ゆく数十度の戦小  
終ふる負せし朝鮮を攻入る鬼將軍と異國の人も惶れ  
死生存亡ハ天命ゆて人力の及ぶべきはあらずとて能  
戦へハ生悪く戦へバ死ると事もハ國中の民を撫育し諸  
士よくなつたに従ふ時ハ席上よく勝敗の理を論じ軍兵を下  
知して進退自然よ整ひゆくハ三軍の著る物具ハ皆大將の  
一身よ重きものなりと事もハ同し事もハなする鋒を争はん臣ハ  
力を好まず事然るべしとも存るはともて退出し  
る時先殿ハいぞかきまをばくしとてあつてあつて  
泣くると我々此覚兵衛ハ清正の時武功ハ大將あり初ハ角  
とり字ありしハ太閤覺の字に書替せしとて覚

兵衛云りハ我一生主計頭よきまされし初ハ軍小知く  
功名しける時朋輩多く鉄炮中アて死しり危き事よ  
たや是をぞめく武士の仕へハとてたておひしとて歸り  
いさや清正時をする今日働神妙いせんかきとて  
刀を賜りて斯の如く毎度其場を去てハ後悔されども  
主計頭其時をうつさば陣羽織或ハ感状をあらん人も  
これ羨むるやめくそきりしゆゑ其よひうましくやむるを  
得る方魔を名士大將といふまじしハ主計頭よきまされし  
本意を失ひしとてなりと忠廣没落の後京よ引籠り再仕  
を求めしりし時語りしとてや  
○前田利常大坂の軍よ功有る加賀へ歸り討死しし士乃





爲タマはかくまで云ヒつゝと仰ヒせし由ニ純ニせし已ハ功ヲとせり  
父ヲと死ニ罪シ小シといへる三千の刑不孝ニよまざる事ヤれ此家ノの亡ホぶ  
べき理コトありまして忠ヲを君ニよゆすハ諂ホふべき事ナらざるべし  
純スの亡ホぶといは遅クく死スといふ事ナらざるべし

正信ニは三万石の禄地ヲ賜ハりし時ニ臣ニハりし鷹師ト也ナら  
をかぎり小取立トらざりしバ只今の禄分ニも入り必天ノ冥加  
よ盡スべしと固辞セり其後子ト上野ニ也ナ我ニ賜ハりし禄ヲ  
後汝ニ禄ヲをまゐりしは三万石ハ我ニ賜ハりし禄ヲを  
辞シせりしはそれより増賜シるは必固辞スるべし禄ノ身ト  
よまざるは禍トなりと逆言セりしは純ノ父ノをよぶ背ト死  
終ニは國ニ亡スびしとせり

○台徳院殿ハ殊ニ禮儀ニ正シしくおせり苟カやも疾言ヲおせり

よまざる事ヲあはれぬハ泥塑ト人のごとくよまんと人ヲせり極メめて  
下民ノ御心ヲを尽スせしめひ孝道ニ深くおせり又信ヲを  
失フひて天下ノハ保チぢごとくと常ニ仰セらる御鷹狩ノよせり  
時ノ時ヲを定めし御膳ノ半ヲも辰ノ鼓ヲをうてバ箸ヲを捨テ  
ておのふ近習ノ人ノ奉膳ヲ終ラざれば辰ノ太鼓ヲをうてバ井伊直  
孝ヲも近習ノ人ノよ向ヒ是君ヲを愛スする事トなり  
大なるひが事ヲしてこそあま君ニ正シし事ヲを好ミまはるべ  
ぬし事ヲも心ヲき道ヲあく仕ヘられよかやう小事ヲを料ラれた  
バ必阿諛ヲをまゐり寵愛ヲを好ミまはるも及ズべしと膳ヲ  
ちりし鼓ノ前ニ終ラりなんよ何ノ苦シき事ヲある是ヲも



誠マコトは小事セウジあまも君キミを欺トギくもりあがり君子クニシハ禍ワタシを未ミ然センは防フセぐかのありと戒イシめまきなり

○直孝ナホタカある耐林ヤシノキ道春ミチハルよ抱負エタし〜〜樊噲ハンクワイが勇氣ユウキきくもりたし  
胸ムネさきでも弓箭ユミヤトリの矜イタき事コトあ〜〜我ワレもも噲クワイが下シモ  
よ立タツべ〜〜と〜〜れ〜道春ミチハル噲クワイハ誠マコトは穢多エタの子コ少スゲメく助目スケメも  
よさ〜〜り〜〜りけれ〜〜も爰コゝふツの故ユヱれハ戦タチひよ臨シ〜〜て矢石ヤシ乃ニ  
中ナカは先掛サキガケす〜〜の〜〜を勇氣ユウキと〜〜い〜〜べ〜〜は是コレハ匹夫ヒツフの〜〜り〜  
噲クワイが顔カホセを犯ユカして高祖カウソを諫イサめし〜〜事コト有アリ足下ソダカよハ〜〜い〜〜べき  
廣言ヒロコトを〜〜た〜〜も〜〜り〜〜自ミゾカ省カサミら〜〜り〜〜噲クワイ小コ及ヨびぬ事コト此ココ  
有アルべき〜〜い〜〜魚イサバ忠孝チウコウ恥ハズカシ色イロあり是コレハ其ソノ比ヒ 大猷ダイウ院イン殿デン御ミ  
病氣ビョウキ〜〜大名ダイメイは相見サウケンあり〜〜り〜〜斯カクい〜〜り〜〜とや世ヨよ

道春ミチハル一生イツシヨウの格言カクゲンとせり

○惺窩セイワ藤フジ敏ミン夫フ 東照宮トウショウミヤの御前ミマエよて秀吉ヒデキヨハ大膽ダイタンある人ヒトなれ

ども大心ダイシンなり〜〜ハヤ〜〜く朝鮮チヨウセンより明メイへ攻入クワシユんと〜〜大膽ダイタンあれも  
秀信ヒデノブを信長シノブナガのあ〜〜ハ仰オラぎ〜〜自立ジリフ〜〜日本ニホンを掌握ニヤウアクせしれ  
〜〜ハ大心ダイシンあり〜〜び〜〜り〜〜後ノチは此事コトを四辻ヨツヂ亞相アサマウ公理キョウリ卿キョウ小  
め〜〜人ヒトあり亞相アサマウの回マワられも其論ソノロン尤モトモあり〜〜り〜〜大佛ダイブツ建立ケンリツ  
ハかの様サマど〜〜ろ〜〜が〜〜る〜〜ぬなり〜〜り〜〜い〜〜も〜〜

○紀伊キイ大納言ダイナノゴン頼宣ヨリノブ卿キョウハ 東照宮トウショウミヤの士男シノヲめ〜〜く〜〜り〜〜せり〜〜

幼コき幼コより 東照宮トウショウミヤの膝下シツカよ〜〜り〜〜文武ブンブの御物活ミモノカキを〜  
〜召尋シヨジン常ツネの質シツよ〜〜り〜〜り〜〜に諫イサを納イルめ〜〜る事コトもな〜〜り〜〜あ  
ら〜〜或時アルトキ腰帶コシカビと〜〜り〜〜備前ヒゼン長光ナガミツの刀カタナ〜〜り〜〜立タチげ〜〜を試コト〜〜る

く不快く切く其まゝ立しるをつきまひたまはバニツはぬく倒れ  
たり左右一同に参入をりたり大に悦く那波道圓は異國よ  
もかゝる利劍もありや又かくまのきゝゝ人やおもと仰有しふ  
道圓兼り異國よハ龍泉太阿あどリ利劍ももゝゝ人殺し  
て樂む人ハ夏の桀王殷の紂王とハ悪王おゝゝ人凡人を  
害しし面白しとおもひハ禽獸の志とまゝ人問めてハあ  
日本めく罪人を切ハ楯多そいゝと憚る色たぬくい  
しふつと入まひぬやどて道圓を呼く先よたつるあそそ至極  
の道理なまゝこゝろより再び自ら試る事有まゝいぞ諫言こゝ  
をんも浅くも徳と賞美ありと又ある時大高源左衛門と  
りまは司る事よ付くこゝろ不幸めく良き士持さるゆゑ

何事もゆゑゝゝぬぬとちりゝゝ人のあはれくと有しと道  
圓ぞて巴が目のくゝゝて人のよゝゝを見明めさるをバ咎め  
どゝゝ人れあはれハ何事ぞや外様古参あも新参あもあ  
人を撰しおさんハ智者も勇者もいゝわども有べきよ人のか  
まゝは目の明ぬあこと直言しゝををばくゝとすまひ道理  
至極せりとして再三感せられゆゝ先の親を悔まひゝるを  
道圓帝よ其子よかゝりゝ乱世よハ臣士君の為ふ死する事有  
太平の世慈く死する事を忘るべうゝと戒めたり  
○慶安四年 辛卯四月二十九日 大猷院殿返させまひく其七月江戸めく  
浪人由井正雪叛逆をせりゝ紀伊大納言殿の仰と称し判形  
を似せ謀書を所く不遣し九橋忠弥芝原又左衛門以下数百人

徒黨一御鉄炮此薬藏の奉行川原重郎も是と與一埋  
火まで遠くより火をさし徒黨の者ども船まで海上にゆる時  
茶と火を移して江戸を一時小焦土とたのさんと巧くしりし心  
替し者三人有て訴へ出あしれしバ九摺をとりぬ生捕  
まこと雪ハ駿河宮の町あしく自害しり右の謀書を教通浪  
人との許し有るる大集りし一大事と案し煩ひとか  
く頼宣卿を殿中へ召て此書を知外有べし其時根子あ  
しりりなんは直に捕へせしめし兵をかくして  
出仕を待居しりし小尾張中納言先友卿水戸中納言頼房卿  
も知仕有此事を告げしり小尾張中納言何条かる企有べきや  
是謀書あてあしりしり小水戸中納言もいふもたしひん

とぞ宣ひしりされども各手は汗を握る事不頼宣卿出仕有  
て座は付まひしり小井伊直孝酒井忠勝松平信綱以度浪人  
とものききしり此次第を申述しりし阿部忠秋かの状を披露  
しりし頼宣は残らば見まひしり氣色うちをけしりし  
目か度らるるゆへに何のたそし事もいりし其子細ハ彼徒  
黨の面々外様大名の判を似せ謀書を作りしりしハ三代の御  
恩を忘ましりや氣ちがひく謀友を企るとの疑も有べきし我お  
が判を似せしるる事故あく治しりしなり幼き公方の御身  
まじり御扱ひもいりしハ我等只今國さし上いりし仰ふ  
従ひしりべし天下安全まじりしあまじり悦面ふあしりてん  
しりしり公をたしりしり一回小感しりしり譽ぬ人もなすりしりれば頼宣は

其浪人ラウニンどもの中サウネン壯年の者四五人助けをまゝカサ重なるセンギ詮義  
有ルべきタメ為タリまりとのシ終ヒひクるシて

○頼宣ヨリノ々キ紀州キあク松江フツエの西ニ北ニ庄ニとリつクあク鷹狩タカトリありてミ湊ミナトふ  
船フネをツケ付ケ陸路ツチノミチを経てハひク折オリ節フシ春ツギとシてハ麥ムギを延ばシてハ僅ツチ小路ミチ  
明アキラくリしク皆みな農民ノウミンの年中ネニナウれル糧シメなクもシてハ供トモの者モノふシむシべクとシて  
再サイ三サン制セイしてハ帰カヘてハひクもシてハ百ヒャク姓セウどもヨロコ悦ヨロコびアへリしテ供トモあり  
一ヒト横目ヨコメの長チヤウ臣シニ北キ前マヘとシてハ次ジ弟テイよシとシてハ何ナニもカ感カン  
得トクぬカ事コトを下々ゲの奴ヤウ系バ殿テン内ウチ曹ノを見てハ馬ウマ鹿カふシてハぞ  
とシてハ殿テンの通トホらセるシ人ヒトはハ麥ムギを脇へシのケ水ミヅを打てクとシて  
有ルべきナニ何ナニもナ麦ムギをちりク通路ツウロをさらシてハ奇キ怪クワイなりシ

國クニの主ヌシ仁ニハハ八ヤチ毎マヘたリのナりトいヒを頼宣ヨリノ卿ケイとシてハひク  
まバ君キミも君とシり臣も臣とシりと人ヒト々タタ々タタり

○頼宣ヨリノ卿ケイ馬ウマを乗りハひク駟カゲの中ナカあク頭カブ巾フシの風カゼは三落オチとシてハ中ナカを取り又鞍ウラをお出デすルもヒを吉見ヨシ喜キ右ミとシてハ者モノ松マツ野ノ惣ソウ太タイ  
郎ロウとシてハ考カウえテ折オリ節フシ頼宣ヨリノ々キ馬ウマ場バふシるシ時トキあるル  
とシてハ惣ソウ太タイ郎ロウ聞キく殿はハいハまシてハ馬ウマ上ノハ練めルぬルとシてハいヒもシてハバ  
頼宣ヨリノ々キ子シ細サイハハいハうウとシてハ尋タねテるシ惣ソウ太タイ郎ロウさんンハ  
一ヒト番バンの上上ノ御ミ名ナ人ヒトとシてハ中ナカを取りハまシてハ小コ田タ原ハラ陣ジンの山山ヤマ道ミチを  
武者ムシャウシ押オシしクるシてハ丹ニ羽ハ長チヤウ重チュウ長チヤウ谷カハ川カハ秀ヒデカサ一ヒト堀ホリ秀ヒデカサ政ササ家カ筋スネ  
をおしクるシが東照テウ宮ミヤの御旗ハタを見てハ皆みな々タタ々タタ前マヘを親しク愛アイふ  
一ヒトツツの谷谷カハ川カハの細橋ホシ有リ此コノ橋ハシへ行かクるシ人ヒト々タタ々タタ下シモを皆歩ミナすル

アツル 東照宮馬上ハシヤウより橋渡ハシカバへ急ツカせむひりうバ三人の大將  
騎キり馬上バシヤウの達人タツジン此細橋ホウシを渡ワタすタツと云イハふと云イハふ馬  
より下カり多シひ御馬ミウマハ遙ハカの下シモを口クチつク四五人イモあハく牽ヒキ渡ワタりて  
人ヒトを走ハいウめと云イハふをカの三人サンニ此大將オホシラ大オホに感カンし馬上バシヤウの達  
人ヒトとハ是コトをコトりシめルれ馬上バシヤウの達人タツジンハ危アヤシき事コトハせぬメのあり  
殊ト又マタ大事オホジの軍イクサを前マヘに置オキてお事コトあれハかクるベき事コトよク感カンじ  
しヨりと兼ツク侍シらシとヤク々クバ頼宣ヨリノブはシくシくシとツて大オホふシるシび  
其詞コトバをカキてス規箱スリゴウ不レ入レらシまシり又前田マヘタ槍ヤみシとリあシあシ耐  
頼宣ヨリノブ々クへシいシるシハ今朝コンテウひシらシ思慮シリヨせシるシれシひシハ大將オホシラの  
一言イチゴンやク重オモき事コトハシらシ千金セニキンも人ヒト此命イニチを替カへシるシのハ有アルま  
りシらシ大將オホシラの一言イチゴンふシらシ忽命トキニイチを奪ツクちシりシけシもシるシまシらシ

存タりシ又マタあシらシハ昔シよりシの事コトふシらシとシらシれシバシかクの朝アサなシて  
時服ジフクをツくシへシらシぬ

◎京極刑部少輔高和播州龍野を領せりコクヨウハノトホ國用甚之クニヨウシノ一ヒトりシりシけ  
まシらシ公儀コウギの事コトハ堀田ホッタ若ワカ狹守サカサノとシらシ藤堂トウタウ大學ダウ頭カウ高次タカトモ和  
の長臣チヤウジン岡七郎オカシチロウ兵衛ヘイエイ定次テイジ相ア加カアシくシ評義ヒヤウギ一ヒト新ニシン糸イト糸イトの士シ小年コトシを限カり  
て永トキく暇イダヒをツくシへシらシの事コトなりシ佐々ササ九郎クウロウ兵衛ヘイエイ長光チヤウミツ年トシ老オシぬシまシて  
とも思慮シリヨあシるシ老オシ々ク呼ヨばシらシれシバ江戸エドへシ藤堂トウタウ堀田ホッタと相會アヒカフひ  
評議ヒヤウギの始シ終シュウまシりシ佐々ササとシらシふシ是コレハ存タりシらシるシ事コトなりシ是ゼ  
非新ヒニシン糸イトの面オモ々ク暇イダヒをツくシへシらシ賑ニギさシるシを足タんとシらシバシ禄ロク多オホき者モノ  
あシらシべシかクヤク佐々ササ一人ヒトが禄ロク数スウ十人ジュウジンより多オホく流ル浪ラウすシともシの  
み艱難カンナンも及カぶシ小禄セウロクの人ヒトハ道路ダウロに乞食コツジキせん是コレ不仁フジンのシ

やて行<sup>イナ</sup>のべき事<sup>コト</sup>ありは<sup>ハ</sup>け<sup>レ</sup>く<sup>ク</sup>論<sup>ロ</sup>ぜ<sup>ク</sup>ま<sup>シ</sup>よ<sup>ト</sup>と<sup>イ</sup>サ<sup>サ</sup>佐<sup>サ</sup>々<sup>々</sup>が  
思<sup>シ</sup>慮<sup>リ</sup>を<sup>コト</sup>問<sup>ヒ</sup>ふ<sup>ル</sup>高<sup>タカ</sup>次<sup>ジ</sup>五<sup>イ</sup>百<sup>ハク</sup>貫<sup>クワン</sup>目<sup>メ</sup>を<sup>ト</sup>取<sup>リ</sup>次<sup>ジ</sup>く<sup>ク</sup>貸<sup>カ</sup>す<sup>ル</sup>ん<sup>ハ</sup>五<sup>イ</sup>百<sup>ハク</sup>貫<sup>クワン</sup>  
目<sup>メ</sup>八<sup>ハチ</sup>臣<sup>シ</sup>歸<sup>キ</sup>路<sup>ロ</sup>小<sup>コ</sup>京<sup>キョウ</sup>少<sup>シ</sup>く<sup>ク</sup>借<sup>カ</sup>り<sup>ト</sup>求<sup>ム</sup>ん<sup>ハ</sup>さ<sup>マ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>モ</sup>爰<sup>コ</sup>一<sup>ヒト</sup>つ<sup>ツ</sup>の<sup>ノ</sup>大<sup>ダイ</sup>切<sup>キ</sup>事<sup>コト</sup>あり  
幾<sup>イ</sup>度<sup>タク</sup>か<sup>ク</sup>く<sup>レ</sup>も<sup>モ</sup>殿<sup>テン</sup>の<sup>ノ</sup>能<sup>ノウ</sup>舞<sup>マヒ</sup>妓<sup>キ</sup>鷹<sup>トウ</sup>狩<sup>コ</sup>屋<sup>ヤ</sup>敷<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>殺<sup>コロ</sup>衣<sup>イ</sup>服<sup>フク</sup>器<sup>キ</sup>物<sup>モノ</sup>萬<sup>マン</sup>事<sup>ジ</sup>小<sup>コ</sup>  
費<sup>ヒ</sup>を<sup>コト</sup>な<sup>シ</sup>一<sup>ヒト</sup>國<sup>クニ</sup>の<sup>ノ</sup>長<sup>チヤウ</sup>臣<sup>シ</sup>其<sup>シ</sup>職<sup>シヨク</sup>小<sup>コ</sup>有<sup>ル</sup>れ<sup>ル</sup>身<sup>ミ</sup>が<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>へ<sup>ル</sup>く<sup>ク</sup>あ<sup>ハ</sup>何<sup>ナニ</sup>の<sup>ノ</sup>益<sup>エキ</sup>う  
何<sup>ナニ</sup>ん<sup>ニ</sup>以<sup>カ</sup>諫<sup>ケン</sup>言<sup>ゲン</sup>ハ<sup>ハ</sup>外<sup>ガイ</sup>戚<sup>セキ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>大<sup>ダイ</sup>祿<sup>ロク</sup>あ<sup>リ</sup>ま<sup>シ</sup>バ<sup>ハ</sup>高<sup>タカ</sup>次<sup>ジ</sup>の<sup>ノ</sup>任<sup>ニ</sup>を<sup>コト</sup>べ<sup>シ</sup>と  
い<sup>ハ</sup>ふ<sup>ル</sup>より<sup>シ</sup>一<sup>ヒト</sup>座<sup>ザ</sup>感<sup>カン</sup>して<sup>シ</sup>佐<sup>サ</sup>々<sup>々</sup>が<sup>コト</sup>言<sup>コト</sup>を<sup>コト</sup>用<sup>イ</sup>ひ<sup>テ</sup>暇<sup>イダ</sup>を<sup>コト</sup>お<sup>シ</sup>や<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>老<sup>ロウ</sup>一<sup>ヒト</sup>人<sup>ニ</sup>  
も<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>長<sup>チヤウ</sup>光<sup>コウ</sup>定<sup>テイ</sup>次<sup>ジ</sup>よ<sup>シ</sup>向<sup>カ</sup>ひ<sup>テ</sup>此<sup>コト</sup>事<sup>コト</sup>と<sup>シ</sup>一<sup>ヒト</sup>旦<sup>イツ</sup>評<sup>ヒヤウ</sup>義<sup>ギ</sup>と<sup>シ</sup>及<sup>キ</sup>ぶ<sup>ル</sup>も  
國<sup>クニ</sup>の<sup>ノ</sup>長<sup>チヤウ</sup>臣<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>ク</sup>根<sup>ネ</sup>と<sup>シ</sup>順<sup>ジュン</sup>從<sup>ジュウ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>ク</sup>一<sup>ヒト</sup>言<sup>ゴン</sup>も<sup>モ</sup>爭<sup>ア</sup>は<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>不<sup>フ</sup>忠<sup>チュウ</sup>た<sup>リ</sup>世<sup>ヨ</sup>の  
國<sup>クニ</sup>比<sup>ヒ</sup>も<sup>モ</sup>た<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>ル</sup>者<sup>モノ</sup>其<sup>ソノ</sup>身<sup>ミ</sup>の<sup>ノ</sup>饒<sup>ユカ</sup>た<sup>リ</sup>を<sup>コト</sup>省<sup>カ</sup>び<sup>テ</sup>尚<sup>ナホ</sup>貪<sup>オン</sup>る<sup>ル</sup>心<sup>ココロ</sup>より<sup>シ</sup>其<sup>ソノ</sup>主<sup>シユ</sup>  
君<sup>クニ</sup>を<sup>コト</sup>諛<sup>ソウ</sup>ふ<sup>ル</sup>古<sup>コ</sup>より<sup>シ</sup>軍<sup>イク</sup>を<sup>コト</sup>臨<sup>リン</sup>て<sup>シ</sup>死<sup>シ</sup>す<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>多<sup>タ</sup>く<sup>ク</sup>諫<sup>イ</sup>サ<sup>ノ</sup>て<sup>シ</sup>席<sup>セキ</sup>上<sup>ジヤウ</sup>に<sup>シ</sup>死<sup>シ</sup>す<sup>ル</sup>者<sup>モノ</sup>

ハ<sup>ハ</sup>少<sup>シ</sup>成<sup>ナシ</sup>縫<sup>カダ</sup>を<sup>コト</sup>な<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>を<sup>コト</sup>す<sup>ル</sup>べ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>何<sup>ナニ</sup>ぞ<sup>イ</sup>諱<sup>イ</sup>め<sup>ク</sup>死<sup>シ</sup>せ  
ざる<sup>ル</sup>べき<sup>ニ</sup>大<sup>ダイ</sup>く<sup>ク</sup>財<sup>サイ</sup>用<sup>ヨウ</sup>の<sup>ノ</sup>多<sup>タ</sup>く<sup>ク</sup>及<sup>キ</sup>ぶ<sup>ル</sup>よ<sup>シ</sup>その<sup>ノ</sup>金<sup>キン</sup>銀<sup>ギン</sup>を<sup>コト</sup>借<sup>カ</sup>り<sup>ト</sup>求<sup>ム</sup>めて  
忽<sup>ト</sup>困<sup>クン</sup>窮<sup>キョウ</sup>不<sup>フ</sup>至<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>ハ<sup>ハ</sup>士<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>祿<sup>ロク</sup>を<sup>コト</sup>た<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>約<sup>ヤク</sup>束<sup>ソク</sup>れ<sup>ル</sup>刑<sup>ケイ</sup>を<sup>コト</sup>違<sup>ヒ</sup>へ<sup>ル</sup>非<sup>ヒ</sup>義<sup>ギ</sup>  
不<sup>フ</sup>道<sup>ダウ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>を<sup>コト</sup>申<sup>マ</sup>行<sup>コウ</sup>ふ<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>成<sup>ナ</sup>り<sup>ト</sup>常<sup>ツネ</sup>と<sup>シ</sup>儉<sup>ケン</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>シ</sup>足<sup>タラ</sup>ざる  
亦<sup>ナ</sup>及<sup>キ</sup>て<sup>シ</sup>俄<sup>ニ</sup>に<sup>シ</sup>患<sup>ウ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>其<sup>ソノ</sup>本<sup>ホン</sup>正<sup>テイ</sup>なり<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>武<sup>ブ</sup>備<sup>ビ</sup>を<sup>コト</sup>全<sup>ソク</sup>う<sup>ル</sup>せん<sup>ト</sup>も  
へ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>コト</sup>の<sup>ノ</sup>成<sup>ナ</sup>り<sup>ト</sup>君<sup>クニ</sup>臣<sup>シ</sup>とも<sup>モ</sup>國<sup>クニ</sup>郡<sup>クニ</sup>を<sup>コト</sup>盜<sup>ヌス</sup>と<sup>シ</sup>祿<sup>ロク</sup>を<sup>コト</sup>竊<sup>ヌス</sup>む<sup>ル</sup>の  
凶<sup>キウ</sup>賊<sup>ソク</sup>あ<sup>リ</sup>ふ<sup>ル</sup>其<sup>ソノ</sup>恥<sup>チ</sup>を<sup>コト</sup>取<sup>リ</sup>て<sup>シ</sup>是非<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>コト</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>シ</sup>や  
汝<sup>ニ</sup>其<sup>ソノ</sup>職<sup>シヨク</sup>に<sup>シ</sup>居<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup>か<sup>ク</sup>心<sup>ココロ</sup>を<sup>コト</sup>定<sup>テイ</sup>次<sup>ジ</sup>一<sup>ヒト</sup>言<sup>ゴン</sup>の<sup>ノ</sup>答<sup>コタヘ</sup>も  
た<sup>リ</sup>ま<sup>シ</sup>り<sup>ト</sup>ル<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup>

○加<sup>カ</sup>賀<sup>カ</sup>中<sup>チュウ</sup>納<sup>ナツ</sup>言<sup>ゴン</sup>利<sup>リ</sup>常<sup>ジョウ</sup>の<sup>ノ</sup>士<sup>シ</sup>不<sup>フ</sup>破<sup>ハ</sup>彦<sup>ヘン</sup>三<sup>サン</sup>四<sup>シ</sup>千<sup>セン</sup>石<sup>シヤク</sup>の<sup>ノ</sup>祿<sup>ロク</sup>を<sup>コト</sup>受<sup>ウ</sup>て<sup>シ</sup>武<sup>ブ</sup>名<sup>メイ</sup>を<sup>コト</sup>知<sup>チ</sup>  
ら<sup>レ</sup>ず<sup>ル</sup>り<sup>ト</sup>其<sup>ソノ</sup>子<sup>コ</sup>も<sup>モ</sup>同<sup>ドウ</sup>く<sup>ク</sup>彦<sup>ヘン</sup>三<sup>サン</sup>とい<sup>ハ</sup>ふ<sup>ル</sup>性<sup>セイ</sup>質<sup>シヤク</sup>愚<sup>ウ</sup>鈍<sup>ドン</sup>よ<sup>シ</sup>ん<sup>ニ</sup>て<sup>シ</sup>常<sup>ジョウ</sup>

小急ぐちある事多し是を諫る人有て時節といふ有り  
り悦入りといひあがら聴用したるもかえりては又いふ  
しり其時不破あざ笑ひ才覚あるは身五百石我愚をれ  
四千石さかみを熱れりいそとりバ色を變じて人の勝れ  
劣於禄の多少よよべきや何とてはわど理の不通あそと  
り不破そまハ我も知ぬ今の詞ハ戯なり亡父常ニ我を誡  
めく小ざうし利根ぶそある事ゆめくはさぶくは人の心  
よ入んとくかりそめあを諷ふ有りべく唯守るべきハ義  
の一筋なり汝武勇の所あり士の義を忘まされと申おれ  
しりし違らんうと日夜是を勤るの外他事なり衣食の  
美を好まば従者と艱難を回くせり日本第一の大家あり

加州の士中我と禄同じ者多し見らまはる人馬のす  
くやうある武具の揃ひ整ひし我小勝る者有とも覺るは  
又利小きよりし事やなりし諂ひし事やハ偽をいし  
事やハ平生日々身小者みく弓箭の家ハ生まら職をゆが  
きせは法身ハ亡父と親しき人なりしあかく諷めしは  
事も忝くよあらび存るなりされも正しき道ニ教へハ  
るべきは只時をんく世ニ從へとや實の本意ハハゆるべし  
らバ言小從さく本意ハ從んハ何れらんと答ふまはバ諫  
し人大小心服ししりしや  
井伊直孝大坂冬の軍ニ物見二騎をやふ雨小濡く帰  
くまは則著らまはる小袖ニツを脱くあはらまはるり安藤





なごんごりひり事あり此事ハ 嚴有院殿の御時あり  
古の武士ハ大やう無用の奢侈を縮めく司のべき事ハ  
吝あるざりしあり関ヶ原一戦の後成瀬吉右衛門ハ伏見  
におき其子隼人正駿府より上りて折原父の許に金を贈  
りたり居間の天井ハ釣置く客来まばあまるとる人へ肴  
を調味せよとて隼人が贈りし金あり是をらんれど  
美味ハ勝まりしとぞかたりたる大坂冬陣和平の後隼  
人が子何某祖父の所より来りしれど此度ハ事故あるまじし  
やがて事ありし其時よた馬をりしめよ江戸廣しとい  
ふも金ニ拾枚の馬ハさの多うしこれをして二人の  
孫ハ各金ニ拾枚をりしとたり昔の士風想ひ及ぶ

御時おや

○永井信濃守尚政ハ執政の職を仰せし時井伊直孝ハ  
對面ハ不肖の身かゝる仕を受其恐懼よ及ぶハ教訓を以て  
其職ハ居れりやともしされし事ハ直孝尤の事ハ我とてへや  
をり身を潔く明朝来りしとて有りされば辱きしや  
て沐浴ハ禮服ハせ其朝の朝行まりし事ハ直孝知あひく世の  
誘よゆじん大敵とてゆるし定めし事ハ一萬事の危  
きよ及ぶし皆是ゆじんより破る事ハ此事かて忘  
られなるといれり

○青蓮院の宮おや幼き宮ハ中院内府通茂公後見しりし  
常ハ碁双六を制せしれりある時公ハ碁ハ将棋の盤



まはらいふもかきあまがたよりそ中夜八驚きて飛去る  
せんよく見ゆき日暮くころの軒下梯付く登り  
忍び行くくどと有りあふ人々進めりまじバ力なく日暮に  
忍びの啼りやうしくはひけきあみ損じて御壺の  
内はとらうとあり大猷院殿御刀とせめい障子ひ  
うせまへバ御臺所せり火とつくとせめい御覧する  
は長四郎と有り大猷院殿汝ハ何ゆ急爰ハ来  
まじと御尋有しふ々の昼御殿の軒下とせめいめれ子  
産しとせめい御覧のあしとせめいありてんとせめい  
いやしく已が心はあし誰がとせめいせめいとせめい  
御推問あまじと幾度もつとせめいぬ年比ふも似ぬ不

敵あまバとく大なる袋の中へお入る口を御手づら  
封じあひ柱は掛させめい事のありを有のまじふやさ  
けんちとせめいせめいせめいと仰せめい御覧を  
かき夜既とせめい常の御座をせめい御臺所ハ  
早く心得させめいせめい幼き心と身の悲しきを  
顧みて竹千代君の仰ありとせめい事を深く感  
たひ女房とせめい仰有る朝飯とせめいせめいへして  
賜はり又口を封じせめいせめいとせめい入せめいして又  
御推問あまじとつひは其刻屈せめい御臺所御言  
ありとせめい重てを慎めよと仰有る御救いあり  
御臺所と向せめいせめい今心とせめい生立とせめい

常山紀談卷之十八終

竹千代殿タケチノノミヤが為タメにハナ双フタあき忠臣チウシンよてこそコトハハめしメ殊ヘの外ノトは  
よんヨとトもモせセあアひヒくクるとトやヤさサまマさサババ諸國シヨコクのノ大名ダイメイれレ代タ々ク奉ホウ  
りリ人質ヒトビシをかカへヘ一ヒツ殉死ジュンシをヲ禁キンどド大佛ダイブツをヲ鑄イくク錢ゼニとシ明メイ  
曆キのノ火災クサイ東都トウトれレ城郭ジヤウカクをヲ始ハジめメとシてテくク灰燼クワイジンとなナりリ諸シヨ  
人ヒト焦爛セウラン小コくクもモ一ヒツ殊ヘよヨ去年キヨネ由ユ井正イノサマ雪セツのノ逆徒ギャクドれレきキりリだ  
有ア一ヒツ後ノチたタまマさサババ人ノ心ココロ安ヤスうウらラざザりリ一ヒツ信綱シノツナ事コト小コ給タマふフ  
きキらラちチあアまマさサりリ後ノチひヒりリ皆みな其その所ところをヲ得エくクはハばバあアくク世ヨの  
人ヒト心ココロもモ静シヅまマりリ昔カキ小コ替カハらラぬヌ時トキとトあアりリぬヌ事コトののあアりリのの賢ケン  
輔ホ中ナカもモ恥ハべベくクとト申マウ傳ツタへヘるル所ところなナりリ

